

平成28年度に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人室蘭工業大学

1 全体評価

室蘭工業大学は、①国際的に通用する理工系人材の育成、②科学技術の知の創造と学術研究の推進、③北海道地域の中核拠点として、地域の活性化と発展に寄与すること等、3つの目標を掲げている。第3期中期目標期間においては、①において学士課程では創造的な科学技術者、大学院博士前期課程では高度な科学技術者、博士後期課程ではイノベーション博士人材を育成すること、②において航空宇宙機システム分野及び環境分野を中心にものづくり産業と学術研究を推進し、その成果を世界に発信する知の創造の拠点を形成すること、③において自治体や地域企業と多分野にわたる産学官金の連携を進展させ、地域が必要とする人材を輩出することを基本的な目標としている。

この目標の達成に向け、学長のリーダーシップの下、各教職員が経営者の一員である認識・自覚を持って業務に携わることを目的とした「室工大未来塾」を開催しているほか、地域企業からの要請に応じて、大学が保有する技術を紹介する「最先端高度技術講座」を開催し、大学の研究シーズの発信を行うなど、「法人の基本的な目標」に沿って計画的に取り組んでいることが認められる。

（「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について）

第3期中期目標期間における「戦略性が高く意欲的な目標・計画」について、平成28年度は主に以下の取組を実施し、法人の機能強化に向けて積極的に取り組んでいる。

- 「変わり続ける産業界で活躍できる力を養成する」をキーワードに、地域産業を発展させる力と、地域産業の芽を見つけ考える力を育成することとした、理工学部を新設する学部改組再編計画案の骨子を策定するとともに、学士課程及び大学院博士前期課程を接続した6年一貫教育プログラムを、20名に対して試行している。（ユニット「理工系人材の育成」に関する取組）
- 国際的な研究拠点形成に向けて、大学が主催するレアアースに関する国際ワークショップへの海外研究者の招へいやジェノバ大学（イタリア）の教授による教育プログラムの実施、世界各国の大学との大学間連携協定実施に向けた検討を開始するなど、海外のレアアース関連研究機関との交流を推進している。（ユニット「国内最高水準の研究拠点形成」に関する取組）

2 項目別評価

<評価結果の概況>	特 筆	一定の 注目事項	順 調	おおむね 順調	遅れ	重大な 改善事項
(1) 業務運営の改善及び効率化			○			
(2) 財務内容の改善			○			
(3) 自己点検・評価及び情報提供			○			
(4) その他業務運営			○			

I. 業務運営・財務内容等の状況

(1) 業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善 ②教育研究組織の見直し ③事務等の効率化・合理化

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載20事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

平成28年度の実績のうち、下記の事項が注目される。

○ 教職員の意識改革に向けた取組

各教職員が経営者の一員であるという認識・自覚を持って業務に携わることを誘起することを目的に、学外有識者を講師として招き、大学ガバナンス強化や工学系教育の改革等をテーマにした大学改革セミナーである「室工大未来塾」を開催している（参加者数延べ149名）。

(2) 財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加 ②経費の抑制 ③資産の運用管理の改善

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載8事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

(3) 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実 ②情報公開や情報発信等の推進

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載2事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

(4) その他業務運営に関する重要目標

①施設設備の整備・活用等 ②安全管理 ③法令遵守等

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載13事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

Ⅱ. 教育研究等の質の向上の状況

平成28年度の実績のうち、下記の事項が注目される。

○ 英語試験の結果を活用した授業改善

英語コミュニケーション能力の向上を目的として、全ての1年次生・3年次生を対象としたTOEIC-IPテストのスコアから、それぞれの学年の全体的な弱点等を分析し、多読・速読の演習や単語小テストを増加させるなどの授業改善策を実施している。

○ 学生に対する細やかな修学支援体制の構築

1～3年次の学生に対して、自己学習時間や単位修得状況等を記録した電子ポートフォリオシステムを活用した、チューター担当教員による修学指導面談を実施している。面談については、担当教員一人あたりの学生数が約5.5人となっており、細やかな修学支援体制を構築している。

○ 地域に向けた研究シーズの発信

地域企業等からの要請に応じて、大学が保有する最新の技術を紹介する「最先端高度技術講座」を、「産業副産物・産業廃棄物のコンクリート利用」や「耐熱・耐摩耗鑄造材料の開発および応用」等のテーマで開講しており、地元企業の職員を中心とする参加者に対して大学の研究シーズの発信を行っている。